

ぶらりわが街宮沢界隈

(23) 新田開発 — | — 青梅線の南北に同じ町名

昭島市の地図を広げると、青梅線の南北に宮沢町、中神町、大神町、田中町等の同じ町名があることに気付くでしょう。同じ名の町は、以前は一つの地続きであつたことがわかります。

江戸時代の市域は、典型的に3つの特徴的な地形をなしている。①多摩川に面した各村南端部の低湿地 ②三段ほどの段丘面(拝島、青柳、立川の各段丘) ③北端部の平坦な武蔵野台地である。最下段の低湿地には、湧水や多摩川から取水した「九ヶ村用水」(*⑭水辺の散策—II—ホテル舞う用水に記載)等の用水路が各村々を貫流し、早くから水田を開いたが、狭い耕作地で、多摩川の洪水を受けやすく、近世を通じてほとんどが劣悪地であつた。水田地帯の北端は段丘崖線に沿った自然林で、湧水を求めてその上または下に、集落が短く帯状に存在していた。段丘面上は、畑地と林であり、その北側の台地方面には、端々は、若干は開墾され畑地になっていたが、人家もなく「山」と呼ばれる、自然林(雑木林)があつた。しかし、武蔵野台地は元々、地味(ちみ)が乏しい荒地や芝地で、地表面の浅く薄い黒土のすぐ下は厚い関東ローム層、その下には砂礫層(されきそう)があり、保水性が悪く、地下の水位も低いところでした。そのためほとんどは馬のまぐさ、堆肥(たいひ)にする枯葉や下草などを採(と)る場所とされていた。

江戸時代初頭の頃は、多摩川沿いの狭い帯状の耕作地を耕し、年貢を納めなければならない村の人々は、より広い田畑を持ち安定した生活を求め、また、農家の後継(あとつぎ)以外の男子は、自分の田細を持ち独立することを願っていました。幕府や領主も、より多くの年貢を得るために、農民が耕作地を広げることを望んでいました。その結果、新田開発が盛んにすすめられ、主に北の広大な武蔵野台地が畑として開墾(かいこん)されました。

こうして開墾が始まり、寛文年間(1660頃)に政策が確立したが、通常の農作業に加えて、人力と貧弱な道具に頼る大変な重労働で、荒野の開墾は決して順調に進まず、実際に開墾された畑となつたのは、わずかでした。しかし、それが急激に進展するのは、八代将軍徳川吉宗の政策した「享保改革」(享保年間(1720頃))における新田開発の奨励以後のことでした。

当時、青梅線の北側は雑木林のままであり、各村々が出来ても、どこの村にも属していない「入会地」であつた。この入会地(入会権)に幕府は目をつけ各村に割り当てて開墾するように命じました。この時代では、まだ、たい肥や灰が主たる肥料でしたので、享保年間に林野で耕作に必要な肥料等得るため、旧来の村が地続きの荒地の開墾が一気に進んだ。こうして、市域の村々の村境を武蔵野台地の中に延ばし、この結果、現在の市域の原形がほぼできあがった。

宮沢村では、昭島の北隣(砂川村—現在は立川市西砂町)に新しい村を創りだした。これが「宮沢新田」である。この他には、現在「宮沢通り」「宮沢中央通り」の名があります。

記

防犯宮沢支部会計 西山 禎一

